

修士論文のスタイル（ガイドライン）

平成 18 年 12 月 19 日

大阪大学大学院工学研究科
知能・機能創成工学専攻
ガイドライン作成 WG

教員一同

概 要

本書は、知能・機能創成工学専攻のガイドラインを目指した書き方の一例を示したものです。平成 11 年 2 月に作られたものを基本としています。現在は、Microsoft 社の Word や日本語 pL^AT_EX 2_ε がメジャーですが、ガイドライン自身は、内容は、作業するコンピュータ環境 (ハードウェア・ソフトウェア) に依存したものではありません。

内容はアスキーの pL^AT_EX 2_ε を使って書かれています。L^AT_EX は、今では t_EX 4 をベースに拡張されており、最近では、TX フォントを使うのが推奨されています。基本的には、pL^AT_EX 2_ε 標準の jbook.cls を基本とし、専攻のガイドラインに沿った変更点は、amsthesis.sty に記述しています。jbook.cls の代わりに松阪大学の奥村晴彦先生の提案しておられる新日本語ドキュメントシステム jsbook.cls を使うこともできます。詳しくは、

sample.tex	:	このファイル
amsthesis.sty	:	修論スタイルファイル
...		

を中身を御覧下さい。

目 次

第 1 章	修士論文のスタイル（ガイドライン）	1
1.1	はじめに	1
1.2	論文の構成と体裁	1
1.2.1	論文の構成（ガイドライン）	1
1.2.2	ページ番号	2
1.2.3	記載範囲	2
1.2.4	体 裁	2
1.3	筆記具と書式	4
1.4	禁則処理	4
1.5	図，表，写真およびそれらの説明文	5
1.6	参考文献	6
1.7	単位，数式，外国語など	7
1.8	その他の注意事項	7

第 1 章

修士論文のスタイル（ガイドライン）

1.1 はじめに

論文は，研究結果を十分良く吟味，整理した後に，これを簡潔，明瞭に，しかも明解に記述すべきことは言うまでもない．論文の内容については「論文審査会」において審査するが，論文の体裁等については論文提出までに研究室でチェックする．

本資料は，論文の体裁等をチェックするときのガイドラインを示したものである．（論文は製本し長く保存するので，以下のとおり丁寧に作成し提出すること．不備のある論文は返却し，訂正の上再提出してもらう．）

本資料の内容に関して疑問点あるいは不明な点がある場合は，各講座の指導教官に相談すること．

1.2 論文の構成と体裁

1.2.1 論文の構成（ガイドライン）

- 論文提出時の構成は図 1.1 のとおりにすること．（修了が確定した後，「論文表紙」から「論文本文」までを製本し保存する．）
- 論文本文の構成の例を図 1.2 に示す．論文の内容によっては指導教官と相談の上，変更してよい．

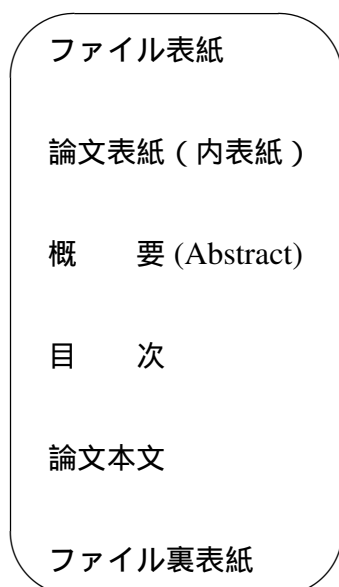


図 1.1 論文提出時の構成

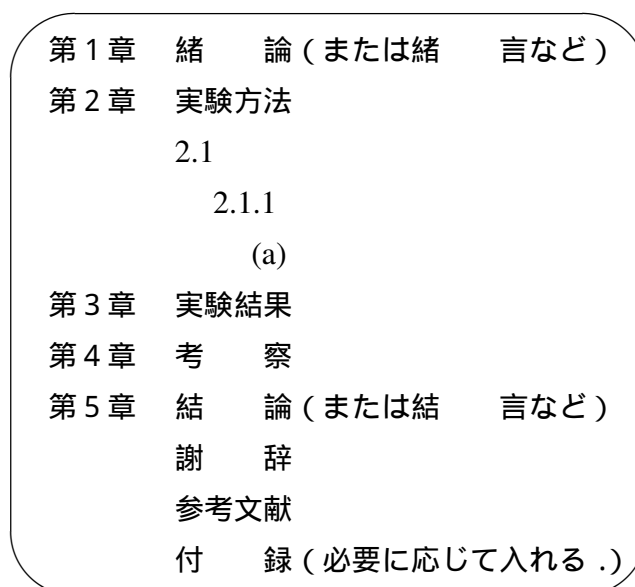


図 1.2 論文本文の構成(例)

1.2.2 ページ番号

論文本文(謝辞,参考文献,付録も含む)の頁の数字はアラビア数字とする。目次にのみ付ける頁番号は小文字のローマ数字を用い本文と区別する。頁番号の位置は各頁の右肩あるいは下部中央とし,論文通じて統一すること。表紙,概要には頁を付けない。

1.2.3 記載範囲

製本時に周囲をカットするので,図 1.3(a)のように,「論文表紙」,「論文表紙(内表紙)」,「概要(Abstract)」,「目次」,「論文本文」は,章の標題や ページ番号をも含め,全ての論文内容は,左:3cm,右:1cm,上:3cm,下:2cmの余白をあけた横17cm,縦24.6cmの枠内に書くこと。

1.2.4 体裁

ファイル表紙

論文提出時には作成論文をファイルでとじること。ファイルの表紙には図 1.3(b)のように論文表紙の記載項目に加え,講座名を記入すること。

論文表紙（内表紙）

図 1.3(c) のようなスタイルで作成すること。論文題目，提出日，専攻名，提出者名を書くこと。

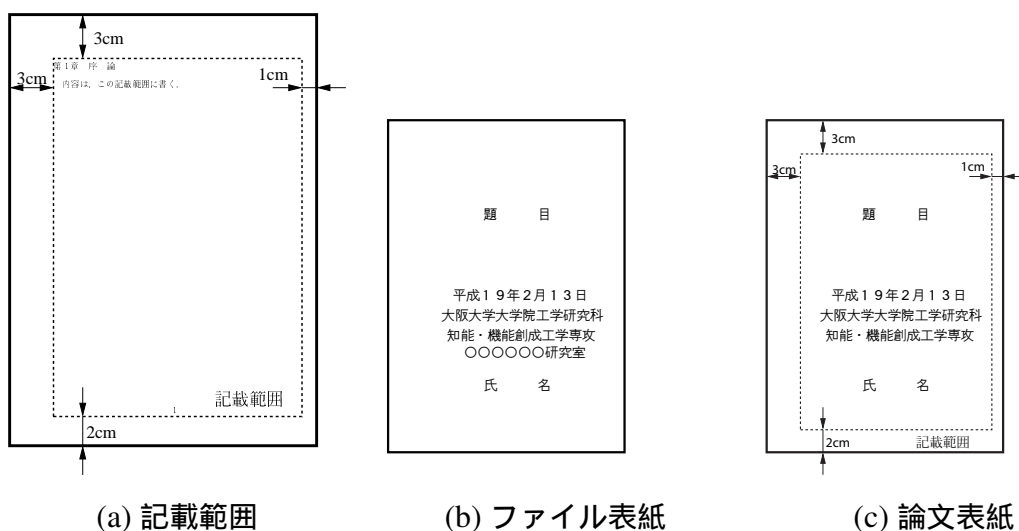


図 1.3 論文の記載範囲と表紙の体裁

概要 (Abstract)

和文でも英文でもよい。1/2 頁以上，1 頁以内とする。1 頁の行数，1 行の文字数などは本文と同一の書式とすること。研究目的，注目点，主要な結果が明解に分かるように記述すること。

目次

目次の見出しが 2 行以上にわたる場合は，最後の行の後に頁番号を入れること（図 1.4）。

4.1.1 高サイクル負荷高温条件下における繊維／マトリックス
界面反応層成長挙動に及ぼす添加元素の影響

55

図 1.4 長い見出しの頁番号の付け方

1.3 筆記具と書式

- ワードプロセッサを使用する場合，用紙はA4サイズとする（感熱紙は不可）．手書きする場合，指導教官が指定する用紙を使用すること．
- 論文の文字は黒色とする．ワードプロセッサの場合は長期保存の可能なものを使用すること．手書きの場合は黒インクや黒の水性ペンは可，ボールペンは不可．
- 1頁約30行，1行の文字数はワードプロセッサを使用する場合は（全角文字に換算して）40字程度，手書きの場合30字程度を標準とし，本文中では統一すること．
- 章は改頁とする．それ以外は不必要に改頁して余白を開けないこと．節，項の間は1行程度以上あけ，変わり目を見やすくする．
- 節，項，目は2.1，2.1.1，(a)の形式で表示する．
- 改行の後の文頭は1字以上あけること．
- 文章は現代仮名使いとし，出来るだけ常用漢字の範囲内で書き，分かりやすく，丁寧な，また簡潔，明瞭に書くこと．
- 本文の文字はワードプロセッサ使用の場合，日本文字は明朝体，欧文字はTimes Roman体を原則とし，手書きの場合は日本文字は楷書，欧文字はブロック体（またはタイプ印書）とする．なお，英文字とギリシャ文字の区別は明確にする．また，邦文の句読点は論文を通じて「，」，「、」，「。」，「。」のいずれかに統一すること．

1.4 禁則処理

- 句読点，)}」などの記号，および上付き・下付き文字は行頭にあってはならない．
- 1語の英単語を2行にわたって書く場合には，音節で切り，ハイフオンで結ぶ．
- Fig. 12，Table 3等の単語と図表番号，1000 K，500 MPa等の一連の数字と単位，Cr，Nb等の元素記号などは，それぞれ，行末で切れて2行にわたることがないようにする．
- 長音符号（「レーザ」など），拗音（「シミュレーション」などの小さな「や，ゆ，よ」）あるいは促音（「～となつた」などの小さな「つ」）等が行頭にくることはなるべく避けるように配慮すること．

1.5 図, 表, 写真およびそれらの説明文

- 写真はすべて図として取り扱う。(以下の説明で「図」としているものは写真も含む.)
- 図, 表は鮮明で長期保存が可能なものに限る.
- 図, 表などは本文を見なくても十分理解できるようによく整理してレイアウトすること.
- 別紙(印画紙を含む)を貼り付ける場合は長期保存が可能な糊を使用すること. 後で簡単に剥がれる糊あるいは変色を生じる糊の使用は禁止. また, 糊付けは丁寧に行うこと.
- プリンタ等で文章中の所定の範囲にレイアウトして出力された図表は, 切って貼り直す必要はない. また, コピーした場合もコピーによる線や汚れがなければ, これに準じる.
- 図, 表の説明文(キャプション)は, 本文を読まなくても内容が理解できるように書くこと.
- 図, 表中に使用する文字(縦軸, 横軸の説明等), および説明文は和文, 英文いずれでも良いが, 論文全体を通じていずれかに統一すること. すなわち, 図, 表中の文字が英文の場合は, その説明文も英文に, 和文の場合は説明文も和文とする(図 1.5).

図 1 試験片形状

表 1 化学組成

Fig. 1 Test specimen

Table 1 Chemical composition

図 1.5 図, 表のキャプションの書き方(例)

- 英文の場合は文頭の単語の最初の1文字のみ大文字とすること. Fig. 1 のように表示する場合には, 省略を示すピリオドを忘れないこと. また, 末尾にピリオドを付けるか否かは論文中で統一すること.
- 図, 表および式の番号は, それぞれ論文全体を通じて通し番号とすることを原則とするが, 論文構成によっては章毎の通し番号(図 2.1, Fig. 2.1 など)としてもよい. いずれの場合にも記入もれのないようによく注意すること.
- 一つの図番号, 表番号で示される図表が複数の頁にわたる時は, 最初の頁に説明

文を付け、後の頁には「図 つづき」、「Fig. Continued」などと付けること。その際、各頁の図の違いが明示されるように留意すること。

- 図の説明文は図の下側に記入し、表の説明文は表の上側に記入すること。(各図表毎に説明文を付ける場合も同じ。)
- 横に長い図表は用紙の長手方向に位置してもよいが、それらの上部はとじ込み側とする。(説明文は図表を正しくみて図の場合は下側に、表の場合は上側に記入すること。)
- A4サイズよりも大きい図表を折り込む場合には右端から1 cm以上、左端から3 cm以上離して折り込むこと。折り込みの頁には図、表のみを貼り付け文章は書かない。

1.6 参考文献

- 参考文献、引用文献および引用図表は、原則として通常の研究報告、論文と同様、本文中の引用個所の右肩に引用順に図6のように番号を入れ、参考文献の項で番号順に図7の要領で、記載すること。

(本文の例) ... であることが判っている^{1),2)}。

(図のキャプションの例) 図1 過去5年間の鋼の生産量^{1),2)}。

図 1.6 参考文献の引用(例)

● 研究論文の場合

1) 著者氏名, 論文表題, 雑誌名, 巻, 号(年)頁

● 書籍の場合

2) 著者氏名, 書籍名, 出版社(出版年)

(必要があれば頁もしくは章など)

● 国際会議, シンポジウム等の論文集の場合

3) 著者氏名, 論文表題, 国際会議名, 開催地(年)頁

(ただし, 開催地に関しては省略してもよい。)

図 1.7 参考文献の書き方(例)

- 欧文雑誌名は略号で表示される場合が多いが、修士論文では原則として略号を用いないこと。

1.7 単位，数式，外国語など

- 各種の量を示す単位はS I単位系を使用することを原則とする。慣用的に用いられる補助単位を用いるときは()内に併記する。
- 数式は原則として、図 1.8(a)のように書くが、簡単な式の場合は、図 1.8(b)のように1行に書いてもよい。また、数式の末尾右側には式番号を付し、数式が多い場合には各数式毎に改行すること。

$\frac{a}{b}, \quad \frac{a+b}{c+d} \quad (7.1)$	$a/b, \quad (a+b)/(c+d) \quad (7.1)$
(a) 原 則	(b) 簡略表記

図 1.8 数式の書き方(例)

- 日本語の表記が定着していない外国語の固有名詞および術語は原語または片仮名書きとするが、各語の表示は論文を通じていずれかに統一する。
- 本文中の英文字の書き出しは、固有名詞は大文字、その他は小文字とする。

1.8 その他の注意事項

文章は丁寧に、誤字のないように留意すること。もし、書き損じた場合には紙を貼ってきれいに修正するか、修正液で丁寧に修正すること。決して横線を入れたり、塗りつぶしたりなどはしないこと。

(以 上)